



## Prologue / Hongkong, Mar.1995

---

3月3日に生まれた赤ん坊は、女の子だった。

香港島。華美酒店 (The Wharney Hotel)。

真っ暗なホテルの部屋で、ふいに電話が鳴る。

深い眠りから急速に引き戻されながら、反射的に受話器をとると、お義母さんだった。カーテンから透けて見える空がまだ暗い。

「午前0時12分、女の子無事出産しました。母子ともに元気ですのでご安心なさってください」

お義母さんの声は少し緊張していた。日本から国際電話で掛けてきたのだ。

「あ、本当ですか。どうもありがとうございます」。

寝ぼけた頭を必死に覚醒させようとしながら、ぼくは答える。その努力はまったく報われなかったが、それでもからだ全体に安堵感が広がっていくのがはっきりわかった。

受話器を置くと、時計の針は朝の6時40分を指していた。起きだしてミーティングに向かう時間にはまだだいぶあった。

ベッドの上にもう一度大の字になりながら、ぼくは長かった10か月を思い出していた。

## Chapter1 / Beijing, Nov.1994

---

北京市内はいつのまにか雪が降りだしていた。

すでに暗くなったドライブウェイには一台もタクシーの姿はない。長い重そうなコートを着た中国人のドアボーイがダメだというように手を振る。

待っていても新しいタクシーが入ってくる気配はない。

背の高い白人の集団が回転ドアから出てくると、ドアボーイにひと言ふた言話しかける。ドアボーイがぼくにしたと同じように手を降ると、白人たちは肩をすくめバラバラとホテルの外へ駆け出していく。

ぼくは腕時計を見た。急いで北京市内のもうひとつのホテルまで行き、荷物を拾ってもう一度ここまで戻って来なくてはならない。

ホテルの外は暗く、そしてひどく寒そうだった。

1994年11月13日。

それはその冬北京市に降ったはじめての雪だった。そしてその雪は、翌日から始まる一大イベントのために世界中から集まってきていた主要な自動車メーカーの関係者すべての頭上に、等しく降り積もろうとしていた。

中国政府は、国内自動車産業の保護育成の観点から外国自動車メーカーの参入を厳しく制限していた。一方で、地球上に残された最後のビッグマーケットを何としてでも手中にしようと、世界中の自動車メーカーが虎視眈々と参入機会をうかがっていた。

そしてこの年、中国政府はこれらの自動車メーカーを北京に呼び集め、将来の中国に相応しいファミリーカーについて提言させることを思いついた。よい提言を行ったメーカーにはチャンスが与えられるかもしれない。そんな思惑から、世界中の主要自動車メーカーにとって「ファミリーカー・シンポジウム」と名付けられたこのイベントは必ずくぐらなければならない関門のひとつとなっていた。

ぼくは、というよりぼくの仕事は、そのシンポジウムの中でトヨタ自動車のプレゼンテーションと展示のすべてを請け負っていた。プランナーとしてその仕事にどっぷりつかることになったぼくは、数カ月にもわたる準備期間の後、最後のリハーサルと本番を見届けるためにこの国に来ていた。

それにしても、この国では流しのタクシーというのは拾えるものなのだろうか。

ホテルに近い場所ではすでに何グループかの外国人たちが、タクシーをつかまえようと手を挙げています。ぼくは思い切って外の大通りへと出ていくことにした。

明らかに電力量の足りない首都のぼんやりした街灯が、決して多くはない車の流れを浮かび上がらせている。雪はぼたん雪となって、激しく降り出していた。

空車のタクシーを見つけて手を挙げると、赤いシャレードの車体がスーッとぼくの傍に滑り込んでくる。ぼくはメモ帳を取り出すと、「京広中心」と漢字で書いたページを指さした…。

## Chapter2 / Tokorozawa, Mar.1995

---

医者は最初から帝王切開にするつもりだった。逆子だったからだ。

だけでもその医者は、何故帝王切開にすべきなのか、それによってどんな危険が取り除かれるのか、そして逆にどんな危険があるのか、その可能性はどれくらいなのか、といったことをきちんと説明してくれた。

そのうえで、あなたたち自身が決断してくださいと言った。

ぼくたちは、帝王切開を選んだ。

そしてその手術の予定は、3月5日の予定だった。

ぼくは出張に出掛けるべきか出掛けないべきか悩んだ。手術予定がいつだろうと、兆候が現れたらすぐに切らなくてはならない。ぼくの出張と手術が重なってしまう可能性は十分にあった。

一方でその出張は、ぼく抜きでは考えられないものだった。その年の6月に行われる上海モーターショーの戦略案を、香港にあるトヨタ自動車のディストリビューターにプレゼンテーションしなければならなかったのだ。

ぼくは悩んだ末、日程を最小限に切り詰めたうえで、恐らくだいじょうぶだろうと考えて出張に出た。

娘が生まれたのは、香港に着いた日の深夜だった。

ファミリーカーシンポジウムについてのオリエンテーションは、夏の暑い日、東京・飯田橋にあるトヨタ自動車東京本社の5F会議室で行われた。

それは、ちょうどぼくが妻の妊娠を知った頃だった。

実のところそれは、ぼくにとってもぼくの会社にとってもまったくはじめての種類の仕事だった。その辺の事情を理解してもらうためには、まず広告代理店の仕事と組織を説明しなければならないだろう。

一般に広告代理店では、営業が仕事を獲得すると、スタッフ部門の各部署から人材を集めてきて、プロジェクトチームを作る。

チームの中では、まずマーケティング部門が市場調査やそれを踏まえた戦略プランの立案を行う。それを受けて、媒体部門はメディアの買い付けを、クリエイティブ部門はTVCFや新聞広告などの表現制作を、SP（セールスプロモーション）部門はイベントや店頭販促活動などの実施計画の立案を行う。

今回のようなコンベンションの場合は、営業とSP局が軸になり、マーケティング部門とクリエイティブ部門は必要があればそれを支援するというレベルだ。したがって、マーケティングプランナーという立場にあるぼくは、大方針さえ決まればあとはお役御免だろうと割合かんたんに考えていた。

だが、はたしてこの仕事はそうはならなかった。

ぼくたちには一般向けのイベントやインナー向けの発表会に関する豊富な経験はあったが、外国の政府に対するプレゼンテーションなど請け負った経験があるものは誰もいなかった。そこからすべての混乱と試行錯誤がはじまった。

オリエンテーションの時点で本番まで3ヶ月ちょっと。切迫する時間と経験の乏しさから、ぼくらは通常の役割分担に関係なく、目の前に次々と現れるハードルをクリアしていかざるを得なくなっていくた。

気がつくとはぼくはトヨタの役員スピーチ用のスライド原稿を書いていたたり、展示用映像のナレーション案をひねり出していたり、展示用パネルのレイアウトに頭を悩ませたりしていた。

それは従来の仕事の仕方から言えばきわめて特殊なことだったし、タイトなスケジュールの中では非常にきつい仕事でもあった。仕事は毎日深夜までの作業となり、休日も急速に仕事で埋まるようになっていった。

それでもその仕事は非常に楽しく、充実感のある仕事でもあったのだ。もともとぼくは自分の手で何かを生み出すということが好きだったし、企画書だけを書き続けていたそれまでの仕事から見て、実際の作品を（たとえ一部であっても）自分の手で作っていけるといえるのはとても刺激

的なことだった。

そうこうするうちにぼくは、現地まで行くはめになっていた。

## Chapter4 / Shanghai, Nov.1994

---

北京からの国内線旅客機が、上海・虹橋（ホンチャオ）空港に着いたのは、夜10時を回った頃だった。

空港を滑り出たタクシーが上海市内に向かって走りだすと、開いた窓からふいに夜風が流れこんでくる。

それは心なしか華やいだ風だった。

つい数時間前まで雪の降る灰色の首都・北京にいたせいかもしれない。広い道路と生気のない人びと。身を切るような冷たい風。その昔遊牧民が大平原につくった首都は、昼間でも暗い色のカーテンに包まれているかのようだった。

11月とは言え、タクシーの窓から入ってくる上海の風は、北京に比べずっとやわらかい。どこからともなく人間のざわめきが聞こえてくるような匂いがした。

ファミリーカーシンポジウムが終わったあと、ぼくらはまっすぐ東京に帰らず上海に立ち寄った。翌年の上海モーターショーの会場を視察し、現地での協力会社を見つけるためだ。

メンバーはセールスプロモーション局のディレクターが2人。その年ぼくたちの会社に入ったばかりの上海生まれのチャイニーズガールZ。それに演出関係をやらせてもらっている協力会社のO氏。彼の香港子会社の香港人代表、それにぼくの6人だった。

陣容は立派だが、実際はそんなに仕事がある訳でもなく、ぼくらは比較的気楽な気分だった。



日曜日。車で公園に出かける。

航空公園駅から浦和所沢線へと折れる左折車線は、週末になると延々と車の行列がつづく。所沢市最大の航空記念公園をめざしてたくさんの人が押し寄せ、3つしかない無料駐車場はあっという間にいっぱいになってしまうからだ。

どうにか車を駐車場に押し込み、なだらかに傾斜した芝生の丘にたどり着く。

丘に寝ころんで、見るともなく人びとの姿を眺めていると、のんびりとした陽光の中で誰もがくつろいでいるのがわかる。若いカップルも、子供連れの若夫婦も、犬を連れた老夫婦も、それぞれがそれぞれの素顔の時間を心から楽しんでいるようだ。

その頃、ぼくたちは子供をつくるかどうかで意見を一致させられないでいた。「早く子供をつくりたい」という妻に対し、ぼくは何となく答えを渋っていたのだ。

結婚して半年がたったばかりだった。もうすこし2人の時間を楽しみたいという気持ちもあったが、それよりも自分が子供をもつという感覚が、もうひとつ馴染めなかった。

納得しないままに何となく「うん、いいよ」と言ってしまうとくなかったのだ。安易な気持ちで子供をもつということを決めてしまっただけいけないような気がしていた。

...芝生の上で子供たちがボール遊びをしている。男の子も女の子もいる。

ふと、子供の頃のことを思い出す。それはほんの昨日のことのようですらある。

そう言えば、もう長いことキャッチボールをやっていない。小学生の頃には1日としてボールを握らない日はなかったのに。

不意にボールを受け止めるときのミットの感触を思い出す。親父から一度としてキャッチボールを教わらなかったぼくは、野球を覚えたのもずいぶん遅かった。そんな訳で仲間からすこしずつ遅れていたぼくは、どうすればバットでボールをミートできるかという感覚も、ついに完全に体得することのないまま少年時代を卒業したのだった。それでも野球は好きだった。毎日近所の路地や空き地で試合やその真似事をやっていた（人数はいつも足りなかったけれど）。

少し離れたところで若いお父さんが、よちよち歩きの子供を追いかけている。その向こうで、もう少し大きい子供にバットの振り方を教えているお父さんもいる。もし男の子が生まれたら、あんな風と一緒に野球をやるのもいいだろうな。

...誰かが言っていた。子供を育てるということは、自分の人生をもう一度生き直すことだと。

「子供、作ろうか」

気づいたとき、ぼくは隣りにいる妻に向かってそう口にしていた。

それから上海でぼくらがすごした数日間は幻想のようだった。

第一百貨店のあたりでタクシーを下り、上海最大の繁華街南京東路を20分ばかり歩いて抜けると、黄浦江にぶつかるあたりにジャズバーで有名な和平飯店がある。かつてはキャセイホテルとして知られたその古いホテルで、ぼくとZは他の仲間たちと待ち合わせていた。

南京東路には、もはや90年代の東京にはない熱気があふれていた。

日本に比べればまだすこし暗いとはいえ明々と電気のついたショーウィンドウにはベネトンやシャネルの名前が（漢字で）並び、ぼくらと全く同じファッションに身を包んだ大勢の中国人が行き来していた。日曜日の銀座や新宿をはるかに超える人ごみとそこから発せられる喧騒からは、21世紀をリードする超大国の姿が透かし見えるようだった。

そして和平飯店。

大勢の西洋人と大勢の日本人と煙草の煙と、そして今世紀前半にさかのぼる歴史が、そのロビーには満ちていた。1時間ほど待ちぼうけを食らった後、ようやく出会えたぼくらは近くのレストランで食事をし、そして灯火のすっかり減った夜の上海の裏通りをそぞろ歩いた。

本当はO氏が和平飯店のジャズを聞きにいきたいという話だったのだが、何かの理由でぼくらはそこに入れなかったのだ。そんな訳で夜の上海を、錦江飯店最上階のバーから香格里拉酒店（シャングリラホテル）のカラオケスナックへとぼくらは流れた。

ぼくはその夜中国語の美しい歌をいくつか覚え、また同時に日本のポップスの多くが中国語に移し替えられてこの国で歌われていることを知った。

しかし何よりもぼくが驚かされたのは歌の中で聞く中国語の美しさだった。会話の中で聞くかぎりは、まったく騒々しい言語なのに、メロディに乗って歌われた瞬間それは哀調を帯びた表情豊かな響きになるのだ。

それは決して中国の歌に特有のどこか哀しいメロディのせいだけではないだろう。その証拠に、近藤真彦の「夕焼けの歌」の中国語バージョンをZが歌うとき、それは僕たち日本人の誰をも黙らせるほど美しい曲となるのだ（そして、彼女の歌もまたとてもうまかった）。

共産主義とヨーロッパ文明の残り香と日本軍の足跡と、そして改革開放路線のすさまじい経済発展の狭間を、Zの美しい歌声が流れ、異国の夜が更けていった。

「レイチェルって女性の名前だっけ？」

「そうよ」

「男性にもレイチェルって名前ない？」

「レイチェルは女性だけじゃないかしら。聖書にラケルって女性が出てくるのよね。そこからとってるのよ」

高原はもう秋の気配がしていた。

湖畔のこぎれいなレストランには、たくさんの赤とんぼが飛来していた。

ぼくたちは昼食をとりながら、五ヵ月になる娘をあやすためにかわりばんこに外へ出なければならなかった。建物の壁面にびっしりととまった赤とんぼや庭に咲いたオレンジ色の菅草の花を、ぼくは娘に見せてやっていた。

どういう訳か、ぼくはそのときまでレイチェル・カーソンを男性作家だと思っていたのだ。『沈黙の春』というその著作は知っていたし、本屋で文庫本を裏返し解説文を読んだりもしていた。だからおおよその内容は知っていたのだが、たぶんシリアスで告発的なその内容が、男性的なイメージをぼくの記憶に与えてしまったのかもしれない。

そのレストランは、室内のあちこちに詩集や写真集を置いていた。それも飾っているという風ではなく、誰が読んでもいいように無造作にテーブルの背後の棚の上に、それらは置かれていた。事実ぼくが手にしたその本も、いろんな人の手垢で汚れていた。

『センス・オブ・ワンダー』というレイチェル・カーソンの本の頁を開くと、

「雨の日は、森を歩きまわるのにはうってつけだと、かねてからわたしは思っていました」。

そんな書き出しではじまるある章が目飛びこんできた。

『沈黙の春』のレイチェル・カーソンの印象から言って、そんな抒情的な文体に出会うとは期待していなかったのだ。ましてレイチェル・カーソンを男性だと思っていたぼくには、なおさらのことだった。

そのとき8月の高原のレストランの中で、目の前のあらゆる情景を超えてぼくの脳裏に甦ってきたのは、高校を卒業したばかりの頃にひとりで歩いた馬酔木（あせび）の森のささやきの小径のことだった。

1983年3月。奈良。

あのときは雨が降っていた。馬酔木の枝や葉を通して煙るように雨が降っていた。

そのときぼくはささやきの小径を探して歩いていたのだが、いま自分が歩いているのが、ささやきの小径だとは知らなかったのだ。

それからとても遠い場所に来たような気がした。

レストランの壁面にびっしりととまった赤とんぼを娘に見せてやりながら（レストランの中では

、妻と妻の両親が食事をしながらぼくを待っていた)、ぼくは思っていた。

後悔というのではない。ぼくがよく知っていたはずのぼく自身からとても遠い場所に、いまのぼくはいるような気がした。それは夢を見ているようでいて、決して夢などではない紛れもない現在であることもぼくは知っていた。

秋になれば、また北京に行かなければならなかった。

ファミリーカーシンポジウムの第2弾として、中国部品産業育成のためのシンポジウムが10月にまた北京の同じ場所で行われることになっており、ぼくとぼくの家はまたその仕事に首までどっぷりと浸かっていた。

ぼくの人生はいつのまにか、全く新しい世界を走りはじめたようだった。

あれから何度か、香港や中国を訪れた。

そしてトヨタはようやく、中国における合弁会社の設立にこぎつけた。もっとも認可されたのはエンジンの合弁生産のみで、車両の製造権獲得については今後の課題ということになる。

ともあれ、将来のチャイナ市場獲得に向けての橋頭堡を築いたというところだ。

そしてぼくは、いま北京・京広新世界飯店の7階で朝食を摂っている。早くも3度目を迎えたシンポジウムの準備のために、ぼくはこの町を訪れていた。窓の外に見える北京の町はあいかわらずどんよりとした曇り空だ。灰色の街路を、土埃にまみれながらたくさんの車が行き来するのが見える。

それでも、灰色の街にも夏の風は吹くようだ。この町にも人のざわめきの聞こえる界隈があり、夕涼みにそぞろ歩くひとびとの姿があることを、今回の出張でぼくは知った。

これからどこへ行くのだろうか。

13億の人口を載せたこの超大国は、いままさに資本主義のパラノドライブに乗かって離陸しようとしている。そしてぼくは、その翼が空に舞い上がり、何年か先に本格的な飛行をはじめ様を見守ってゆくのだろうか（改革開放の路線を現政権が維持するかぎり、それはそう何年も先ではないはずだ）。

だけれども、それはわからない。ぼくは決してこの国でのビジネスに賭けていこうと決めたわけではない。そしてぼくの歩いてゆく道がどちらにつづいているのか、少なくともそれがかつてのようにどこまでもつづく一本道ではなくなったことは確かだ。